

福岡大学 医学会ニュース

No. 41

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

二十一世紀には国試成績の大飛躍を祈って

名誉教授
前内科学第二教授
荒川 規矩男



在職二十七年間はいささか永すぎましたが、最後の数年、特に二〇〇〇年代に入ってから三ヶ月は慌しく一瞬にして過ぎ去りました。そして退職五ヶ月の現時点で一番変わった事といえば、当然ながら大学のノルマから解放された事。然しその他の点では余り変わらず、家では教室から持ち帰った文献の山

が直ちに大学の質の全てを表わすものでは勿論ありませんが、社会的にはそれはやはり客観的評価の指標の一つであり、従って外に出た福大人にとっては共通した心痛事になっています。この原稿依頼の参考資料用と同封されてきた本誌三十九号を開くと、そこにも昨年定年退職された西園名誉教授が、やはり福

大の国試成績を悲憤慷慨されておられます。所が一方では皮肉にも同じ誌上で医学教育賞の受賞も報じられています。一体、福大の医学教育は良くなかったのか、それとも誉められるほど良かったのか、読者は困惑させられたでしょう。

私の考えでは福大の教職員は各自、国試成績の向上を目指し

て教育方法を一生懸命に工夫し、教授会としてもカリキュラムの改訂を繰り返して来ましたが、然し四半世紀かけても実効が表れて来ないという冷徹な現実に立脚すると、今までの方法論は、観念論的には外部から誉められる程良かったかもしれないが、福大内に於いては実質的に通用しなかった事だけは認めざるを得ないのではないかと思います。

とすれば、国試成績の飛躍的な向上の為に実効を約束出来るような、もっと原因療法的な方法は無いものか、抜本的に考え直してみようべき時期に来ているのではないかと思います。例えば福大にも嘗ては特待生制度があり、優秀な学生が国立に行くべきか福大に進むべきか迷った挙句に福大に来た人もいました。優秀な集団は彼等自身の成績が良いのは当然ですが、全体のムードを引き上げる副次的な効果も甚大だったと思います。その



改革とは守るべきものを 守り抜くための行動である

名誉教授
前脳神経外科学教授
朝長 正道



前略
医学部・病院が、内外の厳しい現状を打開して将来の発展を図るために、改革への様々な検討や活動を活発に行っておられることは浅れ聞いております。在職中保守的改革論者と自認していました私としては、的確かつ迅速な改革の実行を切に期待

しております。しかしながら何かしら一抹の不安を覚えていることも確かです。杞憂であることも願いつつも、敢えて申し上げるのは、私の考えをご理解頂き、改革のために少しでもお役に立てればという気持ちからです。その結果でしようか、改革は目前の制度や運営、方法論や技術論に矮小化されてしまい、

改革への動機付けもモラルも今一つ盛り上がり欠け、感動を呼ぶような場面も無く、白け

ているように感じられます。これは教育カリキュラムや教育技法、診療体制や管理体制、施設や設備などをどんなに改善、充実、高度化しても、改革はいずれ水泡に帰すことになるでし

よう。
改革とは、逆説的に言うと、守るべきものを守り抜くための行動であると思えます。守るべきものには根幹的なものから技法的なものまでいろんな段階がありますが、今守るべきものは根幹的な目的と信頼関係です。その意味と価値を明確にして絶えざる意識改革を図るべきです。

目的については、医学部・病院は自分のため、自分の部署のため、教職員のためにあるという錯覚が広く潜在化し、深い病根と化しているようです。その結果として、綺麗な言葉とともにもろい論理で包まれたエゴイズム、他所への無関心、総論賛成各論反対などが日常化して、改革を遅らせ、阻む大きな原因になっていきます。医学部は学生のために、病院は患者のために在るという原点を行動規範とし、第三者評価を導入すべきです。信頼については、大学と教職

追伸
福岡大学を退職して半年が過ぎました。よく悠悠自適の毎日足らずのような気分です。とも

書き連ねましたが、何かまだ舌ざりました。よく悠悠自適の毎日足らずのような気分です。とも

福岡大学医学会
第四十二回例会ならびに
第二十二回総会(報告)
日時 平成十二年九月二十七日(水)
十七時から
場所 医学部臨床大講堂

第四十三回福岡大学医学会例会
進行 辻 祐治 「泌尿器科学」
一 開会の辞
二 会長挨拶 医学部長 池原 征夫
三 第二回福岡大学医学会賞受賞論文講演
竹迫 大伸 氏 「内科学第二」
辻岡 寛 氏 「産科婦人科学」
山本 貴文 氏 「生化学第二」
四 第二回福岡大学医学会賞金賞論文投票
第二十三回福岡大学医学会総会
進行 畠 博 「衛生学」
議題
一、報告事項
二、平成十二年度役員及び評議員の件
三、平成十一年度会計報告および
平成十二年度予算案
四、その他

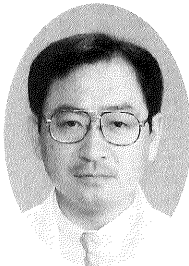
第二回福岡大学医学会賞授与式
一 投票結果発表
二 授与式
三 閉会の辞
*第二回福岡大学医学会賞の開票結果、
論文名および受賞者写真は四面に掲載

新 風

平成12年4月1日付で本学へ赴任、または昇格された方に自己紹介をしていただきました。

内科学第二教授

朔啓二郎



私は本学医学部第一回卒業生（一九七八年、昭和五十三卒）です。二年間の内科研修の後、大学院に進学しました。研修医の時、脳出血の患者さんの血清コレステロールが高値で、リポ蛋白の電気泳動をしようと、実験ノートを見ながら、プレートにアガロースを流し、小さな金属棒を落とすところに血清をいれ、泳動、乾燥、染色をしたのですが、その泳動像のあまりの奇麗さに心打たれ、リポ蛋白の

研究を自ら希望しました。一九八〇～八五年、米国シンシナティ大学内科に留学、Kashyap教授のもと、ヒト生体内リポ蛋白代謝回転実験に従事しました。クリニカルセンターで行うヒト生体での研究でしたので、失敗は許されず、緊張感、毎日のミーティングでリサーチの考え、組立て方をたたき込まれたように思います。帰国後は循環器グループで、冠動脈造影術、血管形成術、リポ蛋白代謝の研究を継続しています。人類の歴史は飢餓との戦いだったのですが、飽食の現代においては、循環器疾患は増加の一途をたどり、その一番の原因がコレステロール等の脂質代謝の異常にあります。私は、これを標的に、循環器疾患の予防から治療まで管理するセン

二〇〇〇年四月に第三内科

内科学第三教授

向坂彰太郎



に赴任いたしました。第三内科は、医学部内科の講座再編に伴い、旧第一内科の消化器（消化管および肝・胆・脾）部門に属していたドクターを中心として、新講座として開設されました。私は、一九七八年の久留米大学の卒業で、卒業後第二内科において、消化器病特に肝・胆・脾疾患の診療に従事してきました。この中で、本学第三内科において全く違和感なく仕事を始めることができました。臨床では肝・胆・脾疾患が専門ですが、教室には消化管疾患のスペシャリストがそろっていますので、肝・胆・脾疾患と消化管疾患の両方を幅広くカバーする講座としたいと思っています。研究面では、消化器疾患の疑問点を基礎的研究により解明し、あるいは、世界中の患者さんが恩恵をこうむることができるよう新たな治療法の開発をめざし、人材を育成していきたいと思っています。『他の研究者がやったことはやらない』という小生の研究

内科学第四教授

斉藤喬雄



私は、昭和四十六年東北大学医学部を卒業し、東北大学第二内科に入局しました。この内科は、高血圧、内分泌、血液、免疫などともに腎臓を専門分野に加えており、私は一貫して腎疾患に関連した診療研究に当たってまいりました。入局当時は、大学紛争の影響というところもあり、医局員が少なかつた反面、さまざまな疾患の患者さんが訪れましたので、腎疾患の診療について多くの経験を積める恵まれた環境で過ごしました。また、臨床的状況を見据えて腎生検の病理診断を行い、治療に反映することが私たち診療グループの目的の一つでしたので、そのような視点に立ち、腎臓内科学の立場から約一三〇〇〇例の腎生検組織診断に携わってまいりました。この結果をもとに、腎疾患における免疫学的な関与について研究を始め、最近では脂質異常が腎に及ぼす影響に注目しております。また、出身内科における専門領域との関係で、高血圧、内分泌異常、膠原病と腎疾患の関連性にも大きな関心を持っております。

今回、福岡大学の内科再編に当たり、その一員に加えていただくこととなりました。私が担当する第四内科の母体は、荒川名誉教授を中心とした第二内科の中で、既に十分な実績を上げております。それを、新しい道標に沿ってさらに発展させることが、私たちの課題かと思えます。どの程度その期待に応えられるか現在のところ未知数ではありますが、皆様のご支援をよろしく御願ひ申し上げます。

脳神経外科学教授

福島武雄



昭和四十八年八月、福岡大学病院開設とともに赴任、朝長教授、澤田助教授とともにゼロから臨床をスタートし、まず自分の育った九州大学脳神経外科の臨床に何とか負けまいと、全力を注ぎました。その後臨床のレベルは十分評価を受ける程になり、医学教育、研究と大学として機能が備わってきました。教室はこの二十七年間で、臨床面では、悪性神経腫瘍に対する新しい免疫療法（INFASMA）、脳腫瘍に対する超音波療法、頭蓋底外科、脳室鏡の脳外科手術への応用、血管障害では血管内外科の導入（動脈瘤のこイル塞栓術）、脊髄・脊髄外科に於ける術式の開発、救命センターの協力による重症頭部外傷への脳低温療法など新しい方向性が示され、かなりの実績を挙げています。しかしまだまだ底は浅く、てんかん外科、機能外科、さらには予防医学への取り組みなど、これから力を入れていかなければならない分野が数多くあります。二十一世紀は、脳の機能的な面を最重要課題とし、治療後の生活の向上のみならず予防医学としての脳神経外科の役割など考えた医療を目指すつもりです。今後は医療の国際化に対応し、幅広い臨床を考える必要があります。教育面でも基本的臨床能力を身に付けさせるような教育カリキュラムが欧米型に改革され、より患者中心の医療がやると注目されつつあります。野口医学研究所の佐藤隆美教

長い間

ありがとう

ございました。

（平成十二年一月一日～九月三〇日まで退職された方）

○荒川規矩男 教授 [内科学第二] 定年のため

○朝長 正道 教授 [脳神経外科学] 定年のため

○岡田 光男 助教授 [内科学第一（現内科学第三）] 博愛会病院へ

○堤 啓 助教授 [精神医学] 進藤病院へ

○笹栗 学 講師 [内科学第二] 福岡医療短期大学保健福祉学科教授に就任

○トート・チボー 助教授 [病理学第二] ハンガリーへ帰国

（以上、六月三十日付）

○司城 博志 助教授 [内科学第三] 村上華林堂病院へ

（以上、九月三十日付）



（司城先生は平成十二年四月一日付で助教授に昇格しました）

教室紹介 寄生虫学

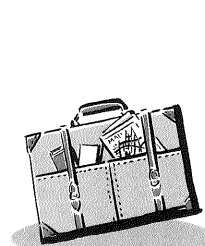
教室の開設は昭和四十九年四月で、その半年後に肺吸虫・顎口虫の世界の権威である宮崎一郎初代教授が着任されました。現在は本船梯嗣二代目教授以下五名が在籍しています。その間、中南米・アジア・アフリカに数度の海外学術調査を行い成果を上げる一方、平成八年の日本衛生動物学会大会他四回の学会を主催してきました。

教育面では、三年次に「寄生虫学講義実習」三十コマ・毎年希望者数一位の「医学概論演習」一週間・「消化器ブロック講義」半コマ、六年次に「総括講義」一コマ、看護学校一年次に「寄生虫

学」二コマを行っています。次に研究面ですが、本船教授は二生吸虫分類学の重鎮として、専門分野の記載を主に行い、他にも寄生虫関連の症例報告や昆虫関係業績を挙げています。赤羽啓栄助教授は熱帯寄生虫学、特に顎口虫症の同定や疫学で、広く海外でも活躍しています。波部重久講師（アニマルセンター兼務）は肺吸虫・住血吸虫等、人獣共通寄生虫症が専門で、主にセンターで活動しています。岩田久寿郎助手は南西諸島西表島の海産魚類寄生虫調査を行っています。

さてWHOによると、地球上では四十億人以上が寄生虫疾患に感染し毎年三百万人以上が死亡しているとされていますが、戦後寄生虫撲滅の優

等生国になった日本は、短期的にみれば新興再興感染症等継続問題は多々あるものの、台中小紛争何かが大量難民が流入しない限り寄生虫急増は考えられません。そんな状況下、平成十年のサミットでは「先進諸国が世界的規模で寄生虫対策に協力する」というハシモトニシアチブが提言され、それに呼応するよう福岡大学では平成十一年の「総合科学研究部専門委員会」の一つとして「ラテンアメリカの熱帯感染症（代表者：赤羽助教授）のプロジェクト」が採択されました。一方今年の沖縄サミットではIT関連事業の推進が提唱されています。これは日本や先進国の国策優先案で、発展途上国の一般大衆には、腹の足しにならないパソコンより食料・感染症の方が先決問題なのは明らかです。こ



におけるポリシーに基づいて、なるべく独創的な研究テーマを選び、地道に研究を行っていくと考えるといます。将来的には、第三内科を福岡県における消化器病の臨床および研究の中核センターに育て上げ、九州一円はもとより、アジアの国々より患者さんならびに研究者が訪れるような科としたいと思っています。今後、多くの先生方にご支援いただきますよう、宜しくお願ひ申し上げます。趣味・旅行、絵画鑑賞（特に印象派）、テニス、皆で陽気に飲んで騒ぐこと。

なるべく独創的な研究テーマを選び、地道に研究を行っていくと考えるといます。将来的には、第三内科を福岡県における消化器病の臨床および研究の中核センターに育て上げ、九州一円はもとより、アジアの国々より患者さんならびに研究者が訪れるような科としたいと思っています。今後、多くの先生方にご支援いただきますよう、宜しくお願ひ申し上げます。趣味・旅行、絵画鑑賞（特に印象派）、テニス、皆で陽気に飲んで騒ぐこと。

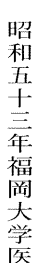
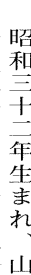
なるべく独創的な研究テーマを選び、地道に研究を行っていくと考えるといます。将来的には、第三内科を福岡県における消化器病の臨床および研究の中核センターに育て上げ、九州一円はもとより、アジアの国々より患者さんならびに研究者が訪れるような科としたいと思っています。今後、多くの先生方にご支援いただきますよう、宜しくお願ひ申し上げます。趣味・旅行、絵画鑑賞（特に印象派）、テニス、皆で陽気に飲んで騒ぐこと。

なるべく独創的な研究テーマを選び、地道に研究を行っていくと考えるといます。将来的には、第三内科を福岡県における消化器病の臨床および研究の中核センターに育て上げ、九州一円はもとより、アジアの国々より患者さんならびに研究者が訪れるような科としたいと思っています。今後、多くの先生方にご支援いただきますよう、宜しくお願ひ申し上げます。趣味・旅行、絵画鑑賞（特に印象派）、テニス、皆で陽気に飲んで騒ぐこと。

なるべく独創的な研究テーマを選び、地道に研究を行っていくと考えるといます。将来的には、第三内科を福岡県における消化器病の臨床および研究の中核センターに育て上げ、九州一円はもとより、アジアの国々より患者さんならびに研究者が訪れるような科としたいと思っています。今後、多くの先生方にご支援いただきますよう、宜しくお願ひ申し上げます。趣味・旅行、絵画鑑賞（特に印象派）、テニス、皆で陽気に飲んで騒ぐこと。

（「新風」三面ににつづく）

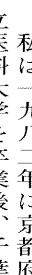
後藤英一

[illegible]

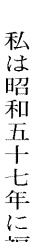
授のご指導により、嗅覚の

原田博文

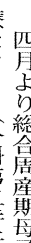
急性性病変による特異な病

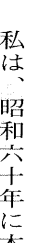


整形外科



推挙により平成二年に九







●お知らせ●

内科再編成に伴い、関連の医学部講座および病院診療科の呼称が下記のように変わりました。

1. 医学部における呼称、主任教授および担当分野

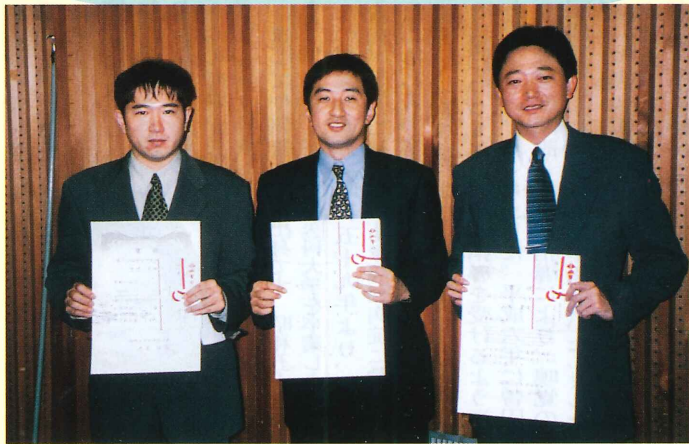
内科学第1	田村 和夫	血液・腫瘍、内分泌・糖尿病、感染・免疫
内科学第2	朔 啓二郎	循環器・高血圧、代謝
内科学第3	向坂彰太郎	消化管、肝・胆・膵
内科学第4	斉藤 喬雄	呼吸器、腎、膠原病
内科学第5	山田 達夫	神経、老年医学

2. 病院における呼称、部長および担当分野

血液・糖尿病科	田村 和夫	血液・腫瘍、内分泌・糖尿病、感染・免疫
循環器科	朔 啓二郎	循環器・高血圧、代謝
消化器科	向坂彰太郎	消化管、肝・胆・膵
呼吸器科	吉田 稔	呼吸器
腎臓内科	斉藤 喬雄	腎、膠原病
腎センター	内藤 説也	腎不全、透析
神経内科	山田 達夫	神経、老年病
健康管理科		健康管理、ドック

祝『第二回福岡大学医学会賞』

「第2回福岡大学医学会賞」受賞者
左から竹迫氏、辻岡氏、山本氏



金 賞 (1名)

辻 岡 寛 氏 [産科婦人科学]

Intracellular cleavage of glycosylphosphatidylinositol by phospholipase D induces activation of protein kinase C α

銀 賞 (2名：50音順)

竹 迫 大 伸 氏 [内科学第二]

Angiotensin I converting enzyme gene polymorphism and insulin resistance in patients with angina pectoris

山 本 貴 文 氏 [生化学第一]

Enhanced antitumor activity of a combination treatment with a mouse / human chimeric anti-MK-1 antibody and lymphokine-activated killer cells in vitro and in a severe combined immunodeficient mouse xenograft model

リサーチビジター

内科学第二
研究生 Fan Ping
范 平

I was born in Kunming, Yun Nan Province, People's Republic of China. I was graduated from Department of Medicine at West China University of Medical Sciences (WCUMS), Chengdu, Sichuan, in 1984. After my graduation, I had been engaging in scientific research

and teaching work in the Department of Biochemistry and Apolipoprotein Research Unit at WCUMS as an assistant for 15 years. My research work was fruitful. I received a Master's Degree of Medicine in December, 1991, and published more than 10 papers. In 1998, I was promoted as an associate professor. However, I had been having great interest in lipoprotein and apolipoprotein research, and had a strong desire to continue my education further, challenging for more difficult research work.

In August 1999, my dream came true. Dr. Saku and Professor Arakawa gave me a chance to come to this beautiful city, Fukuoka, Japan. Lucky enough, Professor Saku provides me excellent research conditions and always encourages me to view matters in a new light and do creative works. Due to his guidance and Dr. Zhang's help, I have succeeded in establishing more than 10 genotyping methods (CETP, Enos, PON, ET1, etc.) and PON activity assay, and done a lot of research work on the association between coronary heart disease and polymorphisms of CETP, Enos, PON, ET1, and ACE genes. I am happy that part of my work will be presented at the 73rd Scientific Sessions of the American Heart Association (AHA), in New Orleans, Louisiana, USA, November 12-15, 2000. At present, I am preparing my first research paper. Here, I would like to express my deep gratitude to Professor Saku and Dr. Zhang.

To get a good command of the up-to-date knowledge on medical sciences and catch up with the progress in modern medical molecular biology, there is still a long way for me to go and a lot of unknown field waiting for us to open. I am determined to do my best to work and learn as much as possible during my staying in Japan. I am confident that what I learn in Fukuoka University will be a treasure for me to serve my country and contribute to the health of Chinese people. In the end, I would like to express my gratitude to everybody of the research group and all of the staffs of the 2nd Department of Internal Medicine for their kind help and sincere cooperation. Thank you again for everything.



左上がDr. Fan Ping、
朔教授・Dr. Zhangとともに

医師国家試験に81名が合格

平成12年3月18・19日に第94回医師国家試験が実施され、本学から81名(新卒61名・既卒20名)が合格した。
合格者氏名および研修先は次のとおり。(福大病院は科名のみ)

井川 敬	九州大学内科	木村 公美	内科	柳田 仁美	麻酔科
池田 修三	長崎大学小児科	熊野 貴史	整形外科	山口 リエ	熊本大学産婦人科
池田 文明	外科第一	西藤 由美	京都府立皮膚科	山田 潤	岡山大学麻酔科
石橋由紀子	筑紫病院外科	貞森 晶子	長崎大学皮膚科	和田 慶洋	広島大学内科
出田 真二	慶應大学眼科	舌間 朋美	眼科	舌間 寛士	整形外科
稲垣 三郎	整形外科	篠田 毅	整形外科	高田 千華	精神科
井上 真改	小児科	清水 寛一	熊本大学整形外科	竹本 周二	久留米大学産婦人科
岩下 弘子	久留米大学産婦人科	杉山 奏子	長崎大学内科	井手 康二	小児科
岩谷 泰江	外科第二	駿河理恵子	筑紫病院内科	宇津宮裕子	大分医科大学産婦人科
印藤 昌彦	広島大学皮膚科	瀬川 芳恵	小児科	大城 徹	精神科
上田 秀一	内科	高尾 英介	筑紫病院消化器科	尾辻 太	眼科
上山 記代	鹿児島大学内科第一	田嶋 友子	長崎大学内科第一	川原 卓馬	脳神経外科
牛島 仁美	小児科	田中 信英	内科	岸 陽子	徳島大学整形外科
浦山 直樹	山口大学内科第一	田村 竜也	徳島大学整形外科	木村美嘉子	九州大学内科第三
江森 亜希	九州大学眼科	鶴 秀敏	久留米大学眼科	権藤久次郎	久留米大学耳鼻咽喉科
圓光 賢希	岡山大学循環器内科	富安 孝成	筑紫病院外科	千鳥 正三	金沢大学皮膚科
合馬 慎二	内科	中原 宏	広島大学小児科	中橋 弘顕	産婦人科
大塚康二朗	昭和大学形成外科	西村 祐美	臨床検査医学	永井 宏	精神科
大村 忠寛	脳神経外科	原田 克則	山口大学内科第一	藤野 歩	小児科
岡松 由記	久留米大学小児科	藤吉 直樹	久留米大学産婦人科	松本 大成	九州大学整形外科
小熊 彩子	九州大学内科第一	古屋隆三郎	泌尿器科	三笠 道太	内科
乙成 美紀	筑紫病院内科	本田 和良	久留米大学耳鼻咽喉科	宮内 珠穂	内科
鬼塚じゅん	九州大学呼吸器内科	前田 篤宏	九州大学内科第二	森 圭一郎	内科
尾畑 十善	筑紫病院内科	宮岡 正喜	筑紫病院内科	許斐 一郎	泌尿器科
園田 康男	九州大学整形外科	宮城 友豪	九州大学内科第一	小林 寛人	金沢大学産婦人科
加藤 里佳	順天堂大学麻酔科	宮崎 智成	熊本大学眼科	佛坂 寛人	内科
金子 公一	鹿児島大学外科第一	安田 淳司	九州大学整形外科	境 隆暢	放射線科